

第1章 金正恩体制と東アジア国際関係（講演録）

平岩 俊司

1 北朝鮮問題と「核なき世界」

二〇一六年、オバマ大統領の訪問ということで、広島は世界中から注目をされました。この事実は、実は北朝鮮問題とも、ある種、非常に印象的な関係を持っています。

オバマ大統領の広島訪問に関しては、さまざまな評価があることは間違いないだろうと思います。私は、アメリカの大統領が初めて広島を訪問されたということは非常に大きな一歩であったらうと評価しておりますし、今後、こうした動きというものをより内容のあるものにしていくという努力が必要とされるのだらうと思います。

オバマ大統領が初めて「核なき世界」に言及したのは、二〇〇九年四月五日のチェコのプラハにおける演説でありました。実は、まさにその日、北朝鮮は人工衛星発射実験と称して、事実上の弾道ミサイル発射を行いました。このミサイル発射に対して、当然、国連は非難をするわけであります。しかし、北朝鮮の立場からすれば、弾道ミサイルではなくて人工衛星発射なのだ、宇宙開発の権利を行使しただけだというわけです。不当ないちゃもんを付けてきている国際社会に対する抗議行動として核実験を行うのだ、というわけです。まさに、オバマ大統領の「核なき世界」に逆行するような行動を取ったわけでありません。

二〇一六年一月六日、北朝鮮は四度目の核実験を行いました。これを北朝鮮自身は水爆実験と称しているわけであります。さらに二月には、人工衛星発射実験と称して、やはり弾道ミサイル発射実験を行った。こういう状況が続いています。北朝鮮は、オバマ大統領の目指す「核なき世界」と逆行する、ある種の裏の歴史のようなことを行ってきていると言えます。

本日は、さまざまな専門家の先生方が、これから、色々な立場で説明をしてくださると思うのですが、議論の土台ということで、今の北朝鮮情勢をどう考えたらいいか、さら

には、北朝鮮とどう向き合ったらいいのかということを考えています。

2 二六年前の党大会と当時の南北朝鮮関係

北朝鮮の体制をどう捉えるか

本日の一つの重要なテーマは、北朝鮮の核問題ということになるでしょう。その際、いわゆる核問題だけではなくて、北朝鮮という、われわれからすると非常に理解の難しい、どういうふうに向き合ったらいいのか分からない、あの体制というものをどのように捉えて、果たして、その体制とは核の問題をめぐって交渉できる相手なのかどうか。さらには、そうした交渉するだけの安定性が、果たして今の北朝鮮にあるのかどうかということを考えなければいけないわけがあります。したがって、まず北朝鮮という体制とどう向き合うのかということをお話しさせていただきます。次に、私なりに、核問題についても少しお話をさせていただきます。そんな手順で考えております。

北朝鮮の体制を考える上で一つの手掛かりとなるのは、二〇一六年五月、三六年ぶりに開催された党大会です。この党大会を手掛かりとして、今の北朝鮮の政治体制をどう理解したらいいのか、そして、どう向き合ったらいいのかというようなことを、少しお話しし

ていきたいと思いません。

この党大会で最も注目されたのは、若い北朝鮮の最高指導者・金正恩——キムジョンウン三〇代、一説によると党大会当時三二歳という情報もありました——が、一体どういう形で新たな北朝鮮の最高指導者になるのか、ということでした。

それまで彼は朝鮮労働党の「第一書記」という肩書であつたわけですが、これは、自分の父親である金正日キムジョンイルの「総書記」という肩書が、ある種の永久欠番になっていて、それに続くようなイメージだつたわけであります。このように、金正恩は、何となく父親の威光を借りて、依然として権力を行使しているというような印象がありました。しかし、今回は「党委員長」という新しい肩書で、北朝鮮の最高指導者として登場しました。まさに、金正恩政権の本来の姿というのが明らかになつたということでもあります。

では、この新しい政権を彼らはどのように位置付けているのでしょうか。このことを議論するためには、なぜ三六年前の間、党大会が開催できなかつたのかということを考える必要があるのだらうと思えます。

三六年前の第六回朝鮮労働党大会は一九八〇年に開催されました。これは、実は今の金正恩委員長キムイルソンの父親である先代の金正日総書記が、初代の金日成キムイルソン国家主席の後継者として

公式にデビューした、そんな大会でありました。当時の情勢を考えてみますと、朝鮮半島は、ご案内のとおり分断国家で、韓国と北朝鮮と、二つの政権があります。北朝鮮からすると、常に韓国よりも自分たちの体制の方が素晴らしいのだということを主張しなければいけないという関係にありました。

金正日が父親の後継者としてデビューした前年の七九年には、現在（講演当時）の韓国の朴槿恵大統領パククネの父親・朴正熙パクチョンヒ大統領が側近に暗殺されました。韓国の政治状況は非常に混乱しました。さらに、それに続く全斗煥チョンドファンの政権は、国内の光州市というところで抗議行動が起きたことに対して軍隊を投入し、その結果、多くの被害者を出しました。まさに全斗煥政権の正統性が問われた時代でした。

おそらく当時の北朝鮮としては、南北朝鮮関係は明らかに自分たちに有利に働いていると思つたに違いありません。その流れの中で、一九八三年に全斗煥一行が訪問しているビルマ（現ミャンマー）のラングーンで爆弾テロ事件（編集部注：北朝鮮工作員による全斗煥暗殺を目論んだ事件）を仕掛け、韓国政府の多くの優秀なスタッフの命が失われるという、韓国側からすれば非常に許し難い事件を起こしたわけです。

一方、韓国国内では、政権運営は非常に厳しいものがあり、紆余曲折を経ながら、ソウ

ル・オリンピックを成功させます。一九八〇年代の前半にオリンピックの開催が決まって、八八年にオリンピックを開催するということになるのです。

当時、モスクワ・オリンピック（八〇年）では、前年（七九年）のソ連によるアフガニスタン侵攻に抗議して西側諸国が参加をボイコットしました。モスクワ・オリンピックの意趣返しては無いのですが、次に続くロサンゼルス・オリンピック（八四年）では社会主義国陣営がボイコットする。二回続けて非正常な状態でオリンピックが開催されてしまった。三回続けて非正常な状況では、オリンピックそのものの維持が難しいのではないかと言われた時代でした。

そのような危機感もあって、ソウル・オリンピックは非常に大きな成功を収めます。さらに、その過程で、ソ連、中国がソウル・オリンピックへの参加に向けて、色々な交渉を行いました。その結果、韓国は、北朝鮮の後ろ盾になっているソ連と中国という二つの大国との関係を持ちました。韓国とソ連は一九九〇年、国交を正常化します。そして韓国と中国も一九九二年に国交正常化を果たしました。

天安門事件とチャウシエスク政権崩壊で気付いた軍の重要性

ソウル・オリンピックが終わった直後ぐらいから、東欧の社会主義諸国の中でも大きな動きが始まります。いわゆる体制改革の動きで、多くの社会主義国が新しい体制に変わっていった。東西冷戦が終焉の方向に向かい、ついにはソ連邦自体が解体してしまうというような状況が生まれるわけであります。とりわけ、北朝鮮にとって大きな問題だったのは、一九八九年に起きた二つの事件だろうと思います。

一つは、六月に起きた中国での天安門事件。これは、天安門に抗議行動で集まった若者たちを中国人民解放軍が排除し、多くの犠牲者が出るという事件でした。

もう一つは、ルーマニアのチャウシエスク政権の崩壊であります。これは、チャウシエスク政権に国民が抗議したことに對して、軍が同調して、最後はチャウシエスク大統領が処刑されました。

この二つの事例から北朝鮮が何を学んだかと言えば、やはり、政治変動の最後の局面では、軍の動向が非常に大きな意味を持つ、ということでした。つまり、軍を掌握してなければ、体制は維持できない。逆の言い方をすれば、軍さえ掌握していれば、体制は何とか維持できるだろう。恐らく、そういうことを考えたのだらうと思います。

社会主義国というのは、本来、党が中心であって、党が軍や国家機構をコントロールするという構図にあります。それを前提にすると、金正日総書記が後継者として登場して以降、彼は党を中心に活動していたのですが、中国での天安門事件そしてルーマニアでのチャウシェスク政権崩壊という二つの事例を経て、軍の重要性を再認識し、ここから後継体制は一気に軍を中心とするものに軸を移していった、ということになります。それがその後の「先軍政治」と呼ばれる体制に続くわけです。

これまでの話をまとめると、ある意味、北朝鮮にとってみれば、一九八〇年に開催された第六回党大会のときは、自分たちが有利だと思っていました。ところが、その後、ラングーン事件や八七年の大韓航空機爆破事件（編集部注…日本人に成りすました北朝鮮工作員によって大韓航空機が爆破された事件）といった、北朝鮮側の失策も出てきました。後者については、日本にも関係があるわけで、実行犯の金賢姫キムヒョンヒ元死刑囚ですが、この人に日本語を教えたのが拉致被害者の田口八重子さんであるということが、後に明らかになります。

このように、北朝鮮は、ある種テロ国家としての烙印を自ら押すような行為に出ました。その過程で、東西冷戦も終わっていく。そして、北朝鮮自らの劣勢を痛感する。ある種、自分たちの体制をいかに維持していくのかということが課題とされた先軍政治というのは、

危機を管理するための危機管理体制と言ってもいいのだろうと思います。

3 三六年ぶりの党大会に見る金正恩体制

危機管理体制から平時の体制へ

このように見ると、先軍政治というのは本来の自分たちの姿ではない、というのが彼の位置付けなのだろうと思います。それでは、三六年ぶりの党大会を開催できたということはどういうことを意味するかというと、いわゆる危機管理体制が終わったのだと。先程お話しましたように、金正日の時代は終わって、金正恩の時代になったのだと。金正恩の時代になったからこそ、本来の姿に戻る、いわゆる平時の体制に戻ったのだということ、恐らく印象付けたいのが今の北朝鮮なのだろうと思います。

党大会では、金正恩が珍しく背広姿で登場しました。これは、おじいさんの金日成に似せているのではないのかというように言われました。もちろん、そういう側面があることは事実ですが、それと同時に、平時の最高指導者を印象付けたいという意図もあったのだろうと思います。

党大会に続き、最高人民会議（日本の国会に相当）では、それまで、まさに先軍政治を象徴

する国家の最高権力機関と位置付けられていた「国防委員会」を解体し、「國務委員会」と名称変更しました。これもやはり、先軍政治というか、危機的な状況は終わったということと印象付けたい北朝鮮の思惑なのだろうと思います。われわれからすると少し分かりにくいのですが、北朝鮮にとって、今回の党大会というのは、非常に長い歴史の中で、今の金正恩政権をどのように位置付けるのかということをやちゃんと考えて進められた、ということとわれわれは理解する必要があるのだろうと思います。

北朝鮮の安全保障観

これまでお話ししましたように、一九八〇年代末以降の社会主義陣営の崩壊は北朝鮮にとって極めて大きな問題でした。それは北朝鮮にとって一つの危機であったわけであり、それを一応乗り切れたということになります。

ここでもう少し具体的に、北朝鮮にとっての危機とは何か、ということをお話ししなければいけないのだろうと思います。それは、シンポジウムのテーマ「危機の東アジア」という問題、核やミサイルの問題にもつながってくるわけです。

冷戦期の北朝鮮の安全保障観は、アメリカの核の脅威に対しては、中国やソ連が、単な

る象徴的な意味を超えた「核の傘」を北朝鮮に提供してくれて、これで自分たちの安全が守られていたのだと、恐らく、そういう認識だったわけであります。ところが、冷戦が終わり、韓国が、中国やソ連と国交正常化したことによって、北朝鮮の立場からすれば、果たして、中国やソ連が自分たちに「核の傘」を提供してくれるのかどうか、これが信用できない状況が生まれてくるわけであります。北朝鮮からすれば、それなら自分たちが独力で核を持ち、アメリカに対して打撃力を持たなければいけない、ということになります。実際問題として、北朝鮮が持っている核やミサイルのレベルがどれぐらいなのか、という点については様々な評価があります。一般的には、まだまだ技術的に課題はあるということなのですが、恐らく、北朝鮮のロジックで言えば、二〇一六年一月の四回目の——「水爆実験」と自称する——核実験、そしてその後の人工衛星発射実験で技術的にも安定してきたということになります。

北朝鮮はこれまでの核開発の成果として核の小型化を果たしつつあり、弾頭の再突入にも成功したと主張しています。このような状況について、どのぐらいの評価が与えられるかは別として、二〇一六年の一月と二月の一連の出来事によって、アメリカに対する打撃力を手に入れ、アメリカの核の脅威に一方的にさらされる状況はもう終わったのだという

のが、恐らく彼らのロジックなのだろうと思います。だからこそ、三六年ぶりの党大会を開催して、本来の平時の姿に戻ったのだというのが彼らの理屈であります。

4 北朝鮮にとっての核と経済の現状

北朝鮮にとっての核

ここで、われわれが気を付けなければいけないのは、北朝鮮は今後、核をどうするつもりなのかということです。

彼らは自分たちを「東方の核大国」と位置付けています。要するに、彼らのロジックからすれば、核兵器やミサイルの技術を手に入れたからこそ、安心して平時の体制に戻るのだ、というわけです。これは北朝鮮の非常に勝手な理屈なのですが、今回の党大会でも、自分たちは責任ある核保有国として、核の先制使用はしない、そして、国際的な非核化のための努力はすると表明しました。

つまり、彼らが国際社会に対して求めていることは、核保有国としての北朝鮮の現状を受け入れるということです。受け入れてくれれば、責任ある核保有国として、先制使用はしないし、世界的な非核化のための努力は十分させてもらうというのが、彼らの全く勝手

な理屈であります。

国際社会は当然、北朝鮮の核放棄を目指します。しかし、今の北朝鮮の主張によれば、核やミサイルを持っているからこそ、安心して平時に戻れるのであり、それらを放棄したら、再び「危機管理体制」に戻らなければいけないということになります。このように、国際社会と北朝鮮の立場や考え方には、かなり大きな差があると云わざるを得ません。

皆さんの中には、若い指導者・金正恩が恣意的に、思い付きで色々な政策をしているというような印象を持たれている方もいるのではないかと思います。そんな国が核兵器を持つというのはどうなのか、そんな国と交渉できるのかという疑問が恐らくあるでしょう。

私は、北朝鮮には北朝鮮のロジックがあつて、必ずしも金正恩という若い指導者が恣意的に行動しているわけではない、と考えています。交渉することができるとかどうかというのは、そこから先の問題です。現状のような体制を持つ北朝鮮だから交渉はできない、ということではなくて、北朝鮮の考え方が問題なのだということ、まずは確認しておきたいと思います。

経済の現状

北朝鮮という国が果たして交渉に足り得るかどうかというときに、よく出てくる考え方があります。それは、北朝鮮は経済状態が非常に悪くて、体制が不安定なのだから、いずれ、大きな動揺をするかもしれない。そういう国と交渉してもしようがないのではないか、というものです。さらに言えば、北朝鮮にとっても、先程お話ししましたように、社会主義陣営が崩壊し、アメリカの核に一方的にさらされる。それが危機であったことは間違いないのですが、それと同時に、経済的な危機というのも大きな状況にあったことは間違いないありません。

とりわけ、社会主義陣営が崩壊したことによって、いわゆる社会主義国間の友好価格による取引というのがストップしますし、天候不良などで経済状況が非常に悪化して、食糧不足が非常に深刻な状況になり、餓死者が出たという報道さえあります。

今回の党大会では、そうした危機的状况は一応脱したとし、本来の社会主義国が行うような多年度型の経済計画、すなわち「国家経済発展五カ年計画」を採択いたしました。内容については、まだ必ずしも明らかではないのですが、少なくとも本来の姿に戻っているということを主張しているわけです。さらに、核と経済の「並進路線」が基本路線とされ

て、やはり、核の放棄はあり得ないのだということ、改めて強調しています。

ただ不思議なことに、北朝鮮は、これまで核実験、ミサイル発射を繰り返して、国際社会から制裁を受けております。それにもかかわらず、例えば韓国銀行などがここ数年間で分析すると——実は昨日（二〇一六年七月二二日）、新しい分析が出たのですが——二〇一五年度は少しマイナス成長だったらしいのですが、その前の四年間は、一%程度ぐらいつつではあっても、いわゆる右肩上がりの経済成長をしていました。

経済制裁を受けている国が、どうして経済成長ができるのか、という疑問があります。中国が抜け穴になっている、というのがそれに対する一つの答えです。国連制裁の対象は「民生用は制限しない」ということですので、もちろん、中国もそれを守ってはいるのでしようが、やはり北朝鮮の態度を変えるまでには至っていません。中国側から、色々な物資が入ってきます。

なぜこのようなことになるのでしょうか。一つには、よく中国の専門家と話をして、そこは気を付けて考えなければいけないと指摘されるのですが、中国と北朝鮮というと、大きさが非常にアンバランスで、非対称な関係であるわけです。そのため、一方的に北朝鮮が中国に頼っているような印象を受けるかもしれませんが、中国の北朝鮮との経済関係は、

中国・東北地方と北朝鮮との間ではバランスが取れている、ということになるわけです。ある種の相互依存関係というのが出来上がっていると云えます。

だから、中国国内にも北朝鮮との貿易取引で商売をしている人たちはたくさんいます。中国からすれば、北朝鮮に対してかなり厳しい経済制裁を行おうとすると、中国自身が傷つく可能性が非常にあるわけです。ですから、中国はなかなか、自分が持っている力をうまく政治力に転化できません。北朝鮮自身も、そのことをよく分かっていますから、なかなか中国の言うことを聞かない、ということになります。

もちろん、そうは言いながらも、中国から潤沢に物が入っているわけではありません。それでも多くの経済専門家によれば、北朝鮮の今までの体制を前提にすれば、いわゆる「改革・開放」的なことをやれば、多少の経済成長はあるのだということですが。しかし、これにも限界があつて、現状以上の経済成長を望むのであれば、対外関係を調整し、物資・資金・技術といったものをもっと外国から入ってくる必要があるのだと指摘されています。だからこそ、今回の党大会でも対外関係の調整ということが盛んに言われたわけです。

5 北朝鮮とどう向き合うか

北朝鮮の関係諸国への要求

これまでお話ししたように、北朝鮮の経済はもちろん悪いのですが、北朝鮮側が非常に追い詰められていて、われわれが求めるものに従うようになる、という状況にはないということを考えなければいけません。そうだとすると、北朝鮮とどのように向き合っていくたらいいいのか、という問題が出てくるわけです。

この問題に関連して、今回の党大会では、韓国について「統一の 동반者」であると、これもまた誠に身勝手なことを北朝鮮は言います。先程お話ししましたラングーン事件^{ヨシビョン}だとか、大韓航空機爆破事件、さらには——北朝鮮は否定しておりますが——二〇一〇年には韓国の哨戒艦を撃沈した事件もありました。同じ二〇一〇年には、延坪島^{ヨシビョン}という韓国領に對する砲撃を行いました。北朝鮮はそのようなことを繰り返しているにもかかわらず「統一の 동반者」ということを言い、軍事当局者の対話も要求しています。その一方で、北朝鮮は「韓国の姿勢いかんでは強行に出る」と、強気の姿勢も示しています。

次に、アメリカに對してはどうかというと、まず国連決議による制裁を解除して欲しい

と言います。また、現在ある一九五三年の朝鮮戦争の休戦協定を平和協定に変えようとしています。さらには、在韓米軍の撤退や米韓軍事合同演習の中止も求めています。誠に身勝手なことを言うわけです。

日本に対しては、戦前の日本の行為について、再侵略の野望を捨て、過去の犯罪を反省するよう求めています。日本側は、これに対して「北朝鮮の主張は一方的である」と反論するという一幕があったわけです。

国際社会の対応

今お話ししましたように、国際社会と北朝鮮の認識のずれは非常に埋め難いものがあるわけです。こうした北朝鮮に対して、アメリカは当然、対話を拒否しておりますし、金正恩自身を人権問題で制裁の対象にしているという状況であります。

北朝鮮は当然、これに反発しています。最近また、五度目の核実験を行うのではないのかとの憶測が流れています（編集部注…九月九日、北朝鮮は五度目の核実験を行った）。あるいは、乱数表を前提とした暗号放送が再開されたというような行為は、これに対するものではないかと言われております。

さらに、韓国も当然、対話を拒否しています。二〇一六年五月六月、朴槿恵大統領は北朝鮮と関係のあるアフリカ諸国を歴訪し、北朝鮮との取引を停止しろということを要求し、北朝鮮包囲網を形成するという状況です。後で議論になるかもしれませんが、アメリカと韓国が、ミサイル防衛(MD)の一環で終末高度防衛(THAAD)ミサイルの導入を決定しました。ただ、これについて中国やロシアが非常に警戒感を示しているため、残念ながら、一つ間違うと、東アジアにおいてかつての「日・米・韓」と「北朝鮮・中国・ロシア」という対立を再現しかねない、そんな状況であることも事実です。

この点、中国とロシアに対して、今後、アメリカや韓国から丁寧な説明がなされる必要があることは間違いのないのだろうと思います。中国も、北朝鮮の問題だけではなく、南シナ海の問題などを含め、アメリカや日本との関係は厳しい状況にありますので、朝鮮半島の問題でどれぐらい協力できるのかということが、今後の課題として残されています。日本の場合、拉致・核・ミサイルの問題に対して、「対話と圧力」の二つの方法をバランスよく使い、なおかつ、国際社会との連携を最重要視する、という路線でやってきました。しかし、この路線は必ずしもうまくいかないところがあります。

その背景には、一つには、北朝鮮の体制をどう評価するのかというところで、日・米・

韓でかなり評価に違いがあるためです。さらには、中国を含めた国際的な連携が非常に難しい状況という事情もあります。そのため、北朝鮮に対して、なかなか有効な手立てがないということでもあります。

6 「分水嶺」に立つ北朝鮮と国際社会

もう時間もそろそろですので、最後のまとめに入りたいと思います。この報告での議論の土台として、北朝鮮というのは、一般に言われているように、金正恩という若い指導者が非常に気まぐれで、思い付きで色々なことをやっている、とても合理的に話ができる相手ではないのだという説に関しては、少し違うのではないか、という私の考えを話しました。

もちろん、われわれからすると、とても理解しにくいし、受け入れ難い部分はかなりある国です。しかし、彼らには彼らのロジックがある。核を持ち、ミサイルを持つというのも——当然、国際社会としては、とても受け入れられるものではありませんが——単に危ういゲームをやっているわけではなくて、彼らなりの理屈が一応はあるのだということです。

また、経済に関しても、北朝鮮は経済的に苦しいから国際社会の言うことを聞いてくれるだろうという、われわれの少し楽観的な見方は、残念ながら必ずしも当たっていないと思います。核やミサイルの問題というのは、長い時間がかかるということに覚悟しなければいけないとしても、できるだけ迅速に対応していく必要がある問題でしょうから、そこはなかなか難しいところかと思えます。

金正恩自身は、今回の党大会を、まさに自分たちの将来に向けての「分水嶺」だと位置付けました。自分たちは、これから、まさに国際社会の中で、堂々とした社会主義国として成功を収めていくのだという意味で「分水嶺」という表現を使いました。

果たして、北朝鮮が本当に、そうした彼らが望むような平時の体制を維持して国家運営ができるのでしょうか。あるいは、再び危機的な状況に戻るのでしょうか。このような展望は、核の問題がどう扱われるかという、このシンポジウムでこれから専門家の方々が議論されるテーマに関わることなのだろうと思います。そういう意味で、金正恩体制にとっても、さらには国際社会にとっても、今はまさに「分水嶺」のときにあるのではないでしょうか。